

レンズで大きく見えるわけ

兵庫県立神戸高等学校 自然研究会 生物班

いろいろなものを大きく見ることができる虫めがねを、よく見てみると、とうめいで、真ん中(まんなか)がふくらんでいます。これを「レンズ」と言います。

●やってみよう！ 底(そこ)がまるいガラスコップをさがしましょう。

1コップに水を入れる。

2コップのむこうがわに、見たいものをくっつけておく。

3コップのむこうがわのものが、大きく見えるのは、コップが「レンズ」のはたらきをしているからです。

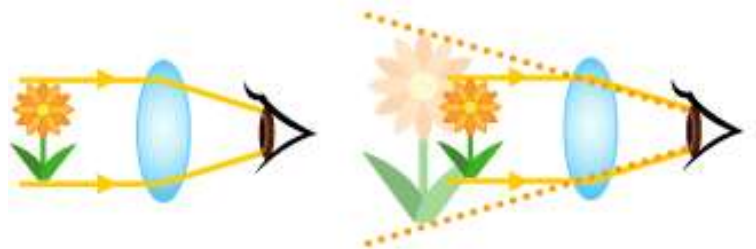


レーウエンフックのガラス玉や今回のビーズもボールと同じで真ん中がふくらんでいます。これも「レンズ」になります。

●レンズで、ものが大きく見えるわけ

空気と水など、もののさかいめで光が曲がってすすむことを、「光の屈折(くっせつ)」といいます。

空気の中をすすんできた光は、レンズのふくらんでいるところに入ると、うちがわに曲がりますが、目は光がまっすぐすすんできたように見るので、花が大きく見えるのです。



レーウエンフックのガラス玉や今回のビーズは真ん中がふくらんだ球なので見たい物を近づけて、眼も近づけてみると、はっきり大きく見えます。

